

な巫の卜に待つたものと思はれる、尤も前述の如く彼等のこれに關する古代の文獻は甚だ少いのであるから、その中のある種族に關して殘存する史料によつて、全體の有様を推察するに過ぎないのであるが、些細な事柄に互つての外は大概同一の状態であつたことは、今日の有様から推しても殆んど誤りないことゝ確信する。今試みに蒙古の巫について最も詳密で且つ古いと思はるゝ William of Rubruck の記事の概略を紹介して、當時に於る彼等の所行の一斑を窺つて見やう。

この人は一二五三年に佛蘭西王ルイ九世からの命を受けて、蒙古の蒙哥汗即ち憲宗の朝廷に使したのであつたが、その時に親しく觀察した巫のことについて頗ぶる詳細に互つた記事を残して居る。これに先き立つて羅馬法王インノセント四世から貴由汗即ち定宗の朝廷に使した Pian de Carpine や、また此の後の Marco Polo の紀行などを併せて考がへて見れば、蒙古の巫に關する知識はほゞ得られることであらう。Rubruck の記事によると、「巫は彼等の間に於ける僧侶である、巫の言ふことは猶豫なく實行されねばならぬ、巫は澤山居るがその間に首長があつて蒙哥汗の宮殿の前に住むで居り、神像の祀つてある車を守護するのは此の首長の任務に屬する、その他のものは龍庭の後方なる指定されたる所に住み、その術を信ずるものは諸方から集つて來る、彼等の中には少しは天文を知つて居るものもあつて、日月蝕を豫言する、彼等は物事を執り行ふについて吉凶の日を卜する、故に蒙古人は巫の同意なしには決して軍を集めないし、また戦を開かない、宮廷に送らるゝものは何に限らず巫が火の間を通して淨め祓をする、子供が生れた時には彼等は招かれてその運命を告げ、人の病む時にはまた招かれて呪文を唱へ、その病が自然に起つたものか、或は呪咀によるものかを判斷する、彼等はまた魔法を以て氣象を變化せしめる、もし